

令和6年度学校経営計画に対する最終評価報告書

石川県立七尾高等学校

1 豊かな人間性と国際性の育成					
重点目標	具体的取り組み	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
<ul style="list-style-type: none"> ・学校行事、生徒会活動や部活動等あらゆる活動を通して、多様な他者と協働しながら目標に向かって挑戦し、課題解決ができる力を育成する。 ・異文化を理解しながら、ふるさとに愛着と誇りを持ち、グローバル、ローカルそれぞれの視点で社会に貢献する資質と態度を育成する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・一人ひとりがボランティアに関する意識を高め、校内だけにとどまらず、震災に係る復旧復興ボランティアなど校外に目を向け、これからの能登の創造的復興を担っていける人材を育成する。 ・各部・個人ボランティア活動「校内」「地域貢献」（随時） 	【満足度指標】 （生徒） 校内や「復旧・復興ボランティア」をはじめとした地域貢献ボランティアを通して、「感謝・思いやり・協力」の心が育ったことを「実感できる」。	校内や「復旧・復興ボランティア」をはじめとした地域貢献ボランティアを通して、「感謝・思いやり・協力」の心が育ったことを「実感できる」・「やや実感できる」と答える生徒の割合の合計が A 85%以上 B 75%以上 C 65%以上 D 65%未満	【12月実施学校評価アンケート】 （生徒） 82.6% B	【判断基準】 C、Dの場合は改善策を検討する。 【分析】 昨年度より1.8%上昇。後期は校内外での取り組みを呼び掛けた。感謝の声掛けや本校ホームページなどでの紹介で、生徒の実感につながったものと考えている。 【今後の取組】 今後も学校外へ視点を向け、地域貢献につながるボランティア活動を働きかけていきたい。
	<ul style="list-style-type: none"> ・令和6年度地域の特色を活かしたふるさと教育推進事業（1、2年） 	【満足度指標】 （生徒） ふるさとの良さを知り、ふるさとに対する誇りと愛着を実感できている。	4月に比べると、ふるさとの文化、産業、地域で活躍する人達を知り、ふるさとに誇りと愛着を「実感できた」・「やや実感できた」と答える生徒の割合の合計が A 80%以上 B 75%以上 C 70%以上 D 70%未満	【12月実施学校評価アンケート】 （生徒） 82.3% A	【判断基準】 C、Dの場合は改善策を検討する。 【分析】 探究活動や進路指導を通して、ふるさとへの理解や、自己と地域のつながりについて考える機会を持ったことが向上につながったと考えられる。 【今後の取組】 学んだ内容、考えた内容について地域社会で発信する機会を増やすなど、アウトプットする中で生徒の理解を深め、地域への誇りと自己の役割意識を高める活動を企画していく。
	<ul style="list-style-type: none"> ・異文化交流 ・留学希望生徒への支援 	【満足度指標】 （生徒） 異文化について理解し、さらに学びたいという意欲が高まっている。	4月に比べると、異文化について理解し、さらに学びたいという意欲が「湧いた」・「やや湧いた」と答える生徒の割合の合計が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	【12月実施学校評価アンケート】 （生徒） 91.7% A	【判断基準】 C、Dの場合は改善策を検討する。 【分析】 各学年で高い水準を維持しながら向上が見られた。生徒への留学プログラムなどの情報提供や、EU大使による講演など、多様な異文化に触れる取り組みが効果を上げたと考えられる。 【今後の取組】 留学に関する情報提供を続け、生徒の興味や意欲を高める取り組みを継続的に実施できるようにしていく。
学校関係者評価委員の評価		復興に向けた地域の取組と連携しボランティア活動に主体的に取り組ませることで、ふるさと教育を推進してほしい。			
評価結果を踏まえた今後の改善方策		復興ボランティアを通し感謝・思いやり・協力の心を育む。また、ひと・こと・ものの繋がりを大切にしながら課題解決力の向上を図る。			

2 進路志望実現のための学力の形成

重点目標	具体的取り組み	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
<p>・基礎学力の定着を着実に進めるとともに、探究型学習を推進し、主体的に困難な課題と向き合い考え抜く力を育成する。</p> <p>・生徒の可能性を最大限に引き出し、多様な大学入試制度の変化に対応できる進路指導を実践する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 志を貫くためのキャリア教育 キャリア教育講演会 全国模試の校内採点による早期弱点指導の徹底 学習時間調査 ホーム担任、教科担当者、部顧問による個人面談 進路情報の発信 進路講演会 大学入試問題解法研究 習熟度別学習指導（週末課題） スーパー難関大学と難関大学別の講座や個別添削指導 金沢大学による出張講座 多様な入試制度に関する研修会 保護者への進路説明会 学習計画の作成とチェック 志望校群別検討会（2年） 志望校検討会（3年） 出願校検討会（3年） 志望理由書の作成（1、2年） 批判的思考力育成 放課後学習会 	<p>【成果指標】（生徒学年別）</p> <p>第1志望に対して明確な理由がある。</p>	<p>高校卒業後について自分の言葉で語ることができると答えた生徒の割合が各学年目標に対して</p> <p>A 100%以上 B 80%以上 C 80%未満</p>	<p>【12月実施学校評価アンケート】</p> <p><生徒：1年生> C 74.2%</p> <p><生徒：2年生> C 52.9%</p> <p><生徒：3年生> C 50.0%</p>	<p>【判断基準】各学年目標 1年120人（6割） 2年140人（7割） 3年160人（8割） Cの場合は改善策を検討する。</p> <p>【分析】自らの進路目的を明確にできる生徒数の第1回との比較は、1年生は微増、2年生は約1割の増加、3年生は約2割の増加である。キャリア教育講演会や進路講演会を行うことは効果がある。一方、学年が上がっても明確な進路目標を持ってない生徒が一定数いる。</p> <p>【改善策】</p> <ul style="list-style-type: none"> 研修を通して教員の面談力を高める。 キャリア教育講演会や進路講演会の内容をより充実させる。 PASSLABO, ROJE, UTVC 等外部との連携を図り、生徒をサポートする体制を構築する。
		<p>【成果指標】（1年生生徒）</p> <p>学習習慣を身につけ、学力を向上させている。</p>	<p>入学後、学力を伸ばした生徒が</p> <p>A 140人以上 B 120人以上 C 120人未満</p>	<p>【7月進研模試と1月で3教科総合偏差値を伸ばした生徒】</p> <p><生徒：1年生> B</p>	<p>【判断基準】1月の模試結果で判定する。 Cの場合は改善策を検討する。</p> <p>【分析】</p> <p>クロス分析の結果、偏差値を5以上伸ばした生徒は86名。一方、5以上下げた生徒は42名。5以上伸ばした生徒は中位層に多く、下げた生徒も同様であった。</p> <p>【今後の取組】</p> <p>上位層の育成と、中位層の強化のために、個別指導や進路へのモチベーションを上げる指導を行っていく。</p>
		<p>【成果指標】（1年生生徒）</p> <p>スーパー難関・難関大学入学に堪える学力を獲得している。</p>	<p>1月進研模試での学力到達度（GTZ）のSランクの生徒が</p> <p>A 30人以上 B 20人以上 C 20人未満</p>	<p>【1月進研模試3教科総合での学力到達度（GTZ）】</p> <p><生徒：1年生> B</p>	<p>【判断基準】1月の模試結果で判定する。 Cの場合は改善策を検討する。</p> <p>【分析】</p> <p>上位層は一定数いるものの、最上位層が育成されていない。また、苦手教科を抱えている生徒が多い。</p> <p>【今後の取組】</p> <p>得意苦手を問わず、高い進路目標を持たせ、そこに到達するために必要な取り組みを生徒とともに計画性をもって行う。</p>

		【成果指標】 (2年生生徒) 着実に学力を向上させている。	2年次に、学力を伸ばした生徒が A 160人以上 B 130人以上 C 130人未満	【7月進研模試と1月で3教科総合偏差値を伸ばした生徒】 <生徒：2年生> C	【判断基準】 1月の模試結果で判定する。 Cの場合は改善策を検討する。 【分析】 7月の模試における中間層が伸び悩んだ。 【改善策】 ・中間層は、3教科の学力の均衡がとれていない生徒が目立つ。個別面談などを通して苦手科目克服への意識を一層高めさせる。基礎基本を反復して学習できる機会を設ける。
		【成果指標】 (2年生生徒) 着実に学力を向上させている。	1月進研模試3教科総合で学力到達度（GTZ）のSランクの生徒が A 35人以上 B 25人以上 C 25人未満	【1月進研模試3教科総合での学力到達度（GTZ）】 <生徒：2年生> B	【判断基準】 1月の模試結果で判定する。 Cの場合は改善策を検討する。 【分析】 7月の模試結果と比較すると、上位層は順調に成績を伸ばしている。 【今後の取組】 ・個別指導を継続し、記述力をさらに高めさせる。 ・個別面談により自律的な学習のサポートを行う。
		【成果指標】 (3年生生徒) 生徒ひとりひとりが高い志望を持ち、進路実現を果たしている。	スーパー難関大学の合格者数が A 5人以上 B 3人以上 C 3人未満	【大学入試結果】 <生徒：3年生> スーパー難関大学 C 難関10大学 C 金沢大学 B 国公立大学 B	【判定基準】 大学入試結果で判定する。 Cの場合は改善策を検討する。 【分析】 スーパー難関大学は京都大学に3名出願して1名のみ。難関10大学は19名が一般選抜に出願して11名、総合型選抜で1名。金沢大学は一般選抜で26名出願して15名、その他の選抜で14名。国公立大学全般では一般選抜で91名、その他の選抜で35名となった。今年度は一般選抜以外の選抜への出願者数を例年より大幅に増やし、国公立大学に絞ると合格率は54％であり、これが国公立大学の合格者数に良い影響を与えた。低学年時から取り組んできた探究を活用したキャリア教育の成果であると分析している。 【今後の取組】 2年連続で東京大学、国公立医学部医学科の合格者を出すことができなかった。支援いただいている外部機関との連携を有効に活用し、東京大学を志望し、合格できる生徒の育成を図るとともに、教員自身の指導力養成も図っていく必要がある。
			難関10大学の合格者数が A 20人以上 B 15人以上 C 15人未満		
金沢大学の合格者数が A 35人以上 B 25人以上 C 25人未満					
国公立大学の合格者数が A 140人以上 B 120人以上 C 120人未満					
学校関係者評価委員の評価		様々な体験を通し人と関わることで社会的課題を把握し解決に向けた自己の役割を理解させるとともに必要な学力を育成してほしい。			
評価結果を踏まえた今後の改善方策		本校の強みである探究型学習を更に推進し、多様な入試に対応し得る学力の形成はもとより、社会に求められる人材の育成を図る。			

3 教員の総合的な指導力の育成					
重点目標	具体的取り組み	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
<p>・「石川県教員育成指標」を踏まえ、教職に必要な素養、教科指導力、学級経営力、生徒指導力などの実践的な指導力の向上に努める。</p> <p>・校内での〇</p>	<p>・スマートフォン、携帯電話等によるインターネットトラブル（いじめを含む）に関する校内講習会の実施と、新しいトラブル対策のための資料の作成と配付</p> <p>・生徒会によるネットトラブル防止啓発活動の企画・実施</p>	<p>【成果指標】（生徒）</p> <p>スマートフォン等によるインターネットトラブルに対する、安全・予防対策を実践している生徒の割合が高まっている。</p>	<p>スマートフォン等によるインターネットトラブルに対する安全・予防対策を、「十分に実践している」・「やや実践している」と答えた生徒の割合の合計が</p> <p>A 100%</p> <p>B 90%以上</p> <p>C 85%以上</p> <p>D 85%未満</p>	<p>【12月実施学校評価アンケート】</p> <p><生徒></p> <p>B</p> <p>95.7%</p>	<p>【判断基準】C、Dの場合は改善策を検討する。</p> <p>【分析】前回より3.2%上昇した。SNSやスマホなどの端末機器の取り扱い方について、情報課と連携を図りながら取り組み、一定の効果が見られた。</p> <p>【今後の取組】今後もネットトラブルに関して安全対策をとるよう注意を呼びかける。また、普段からの使用マナーを守ることがトラブル防止につながるものであると考えるため、校内での使用マナーについても注意を呼びかけていく。</p>
	<p>・「生徒による授業評価」の結果に基づく授業改善の推進</p> <p>・予習・復習チェックの呼びかけ</p> <p>・「予習・復習を促す効果的な指導」の研究</p> <p>・「探究」で培った指導法に関する研修及び情報共有</p>	<p>【成果指標】（生徒）</p> <p>国語・数学・英語において「予習や復習（振り返り）をして次の授業に臨んでいる」と答える生徒の割合が高まっている。</p>	<p>国語・数学・英語において「予習や復習（振り返り）をして次の授業に臨んでいる」に関して、「あてはまる」・「ややあてはまる」と答える生徒の割合の合計が</p> <p>A 90%以上</p> <p>B 85%以上</p> <p>C 80%以上</p> <p>D 80%未満</p>	<p>【12月実施第2回生徒による授業評価】</p> <p><生徒></p> <p>C</p> <p>83.6%</p>	<p>【判断基準】C、Dの場合は改善策を検討する。</p> <p>【分析】昨年度の下がり幅（1.4%減少）よりは改善しているものの、前回から0.8%減少。スマホの使用時間について、「学習関連」は増加、「学習以外」は減少となったものの、「学習以外」の時間の割合はまだ多く、家庭学習時間に影響している。</p> <p>【改善策】生徒課と連携し、スマートフォン利用についての指導を継続的に行う。また、授業の準備（予習・復習）へのモチベーションが下がらないよう細かな声掛け・雰囲気づくり・点検を粘り強く継続していく。</p>
		<p>【努力指標】（教員）</p> <p>探究の要素を取り入れた授業を実践している。</p>	<p>探究の要素を取り入れた授業を実践しているに関して「あてはまる」・「ややあてはまる」と答えた教員の割合が</p> <p>A 90%以上</p> <p>B 80%以上</p> <p>C 70%以上</p> <p>D 70%未満</p>	<p>【12月実施学校評価アンケート】</p> <p><教員></p> <p>D</p> <p>62.8%</p>	<p>【判断基準】C、Dの場合は改善策を検討する。</p> <p>【分析】前回から3.9%減少した。「探究の要素を取り入れた授業」について、基準がわかりにくく、「実践している」と答えづらい教員もいると思われる。</p> <p>【改善策】どのようなものが「探究の要素」になるかについて周知し、研究授業においてもその視点を意識的に取り入れ教科会議等で共有することで、さらに授業改善を進めていく。</p>

<p>J T による若手研修を、中堅・ベテラン教員の経験を活かしながら効果的に進め、教職員全体の指導力向上を図る。</p> <p>・GIGA スクール構想に基づいて 1 人 1 台端末を効果的に活用した授業を実践する力を身に付けることにより、生徒の学びの変容を促す。</p>	<p>「石川県教員研修計画」に基づいて、各課・学年・教科を主体とした O J T による若手教員育成を推進する。</p> <p>情報課や ICT 支援員と協力し、学校を挙げて GIGA スクール構想を推進する。</p>	<p>【満足度指標】 (若手教員) O J T をとおして教員としての成長を実感できる。</p> <p>【努力指標】 (教員) Chromebook を生徒に活用させながら、主体的で深い学びを目指した授業を実践している。</p>	<p>O J T により教員としての「知識・技能・指導力が向上している」・「やや向上している」と答えた若手教員の割合が、</p> <p>A 95%以上 B 90%以上 C 85%以上 D 85%未満</p> <p>「Chromebook を生徒に活用させながら、主体的で深い学びを目指した授業を実践している」に、「あてはまる」「ややあてはまる」と答えた教員の割合が、</p> <p>A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満</p>	<p>【12月実施学校評価アンケート】 ＜教員＞</p> <p>D 65.2%</p> <p>【12月実施学校評価アンケート】 ＜教員＞</p> <p>C 69.8%</p>	<p>【判断基準】C、D の場合は改善策を検討する。</p> <p>【分析】前回から－21ポイントと大きく下回った。若プロとして新たな研修や取り組みは実施せず、日々の業務に関して周囲の教員と実践していくことを OJT のベースとしたが、「向上している」と実感するに至らなかった。</p> <p>【改善策】日々の指導・業務（教科・生徒・保護者・分掌・事務仕事など）を、周囲の教員と連絡調整しながら行い（計画・実施）、改善していくことが、指導力向上につながるという意識を共有していく。</p> <p>【判断基準】C、D の場合は改善策を検討する。</p> <p>【分析】同年7月比は減少したが、昨年同月比では微増した。中間報告で掲げた改善策である情報課での研修や実践事例の紹介は行えた。一方で、指導主事マルチサポートや公開授業の実践が年度末となり、意識改善が不十分であった。</p> <p>【改善策】継続した研修の実施や外部講師を計画的に活用することで、教員が自信を持って授業ができる環境作りを行う。また、生徒が Chromebook を活用していく中で、主体的で深い学びに結びついていると教員が実感できるよう、教務課と連携して授業改善を推進する。</p>
<p>学校関係者評価委員の評価</p>	<p>ミドルリーダー育成には、適材適所に留意した上で試行錯誤しながら、自身で考え行動することを通して経験値を高めていくことが大切ではないか。</p>				
<p>評価結果を踏まえた今後の改善方策</p>	<p>分掌での若手・中堅・ベテランの配置や執務室の座席配置を工夫することで OJT を推進し、若手育成と併せミドルリーダーの育成を図る。</p>				

4 魅力ある学校づくり					
重点目標	具体的取り組み	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
<p>・文理融合の視点で特色ある教育活動（SSH・NSH事業）を推進し、その成果を全国的に普及する。さらに、小・中・高・大等と連携・交流を推進し、科学教育の水準向上を目指す。</p> <p>・能登の創造的復興を目指して、ひと・もの・ことつながり、社会問題を解決する力を育む。</p>	学校設定教科「探究」の成果物等の他校への普及	<p>【成果指標】</p> <p>本校の開発した教材を提供し、県内外の他校（中学校を含む）に成果の普及を図っている。</p>	<p>本校の開発教材や報告書の閲覧件数（ダウンロード数）が、前年度に比べて増加数が</p> <p>A 1000件以上 B 500件以上 C 200件以上 D 200件未満</p>	<p>【成果指標】</p> <p>A</p>	<p>【判断基準】C、Dの場合は改善策を検討する。</p> <p>【分析】SSHのどの項目においても、ダウンロード数が非常に多い。ホームページにより、着実に成果普及ができています。</p> <p>【今後の取組】これまで通り刷新を続け、さらに良いホームページにする。</p>
	物理チャレンジ、化学グランプリ、生物学オリンピック、数学オリンピック、全国総合文化祭等の全国規模の各種大会やコンテストへの出場者の育成	<p>【成果指標】（生徒）</p> <p>全国大会相当への出場の決定数が増えている。</p>	<p>全国大会相当への出場が決定した個人またはグループ数が</p> <p>A 4以上 B 3 C 2 D 1以下</p>	<p>【成果指標】<生徒></p> <p>A</p>	<p>【判断基準】C、Dの場合は改善策を検討する。</p> <p>【分析】高校生バイオサミット決勝進出3件、次年度全国総文県代表5件。</p> <p>【今後の取組】各学会が実施する全国規模の高校生発表会に参加する。これにより本校の課題研究の成果を普及する。</p>
	英語に関するコンテスト（スピーチ、ディベート、エッセイ、暗唱、劇など）、弁論大会、その他課題研究コンテスト等への参加や応募の促進	<p>【成果指標】（生徒）</p> <p>左記の大会やコンテストに参加し、実績を上げている。</p>	<p>左記大会やコンテストに参加し</p> <p>A 入賞 4件以上 B 入賞 3件 C 入賞 2件 D 入賞 2件未満</p>	<p>【成果指標】<生徒></p> <p>A</p>	<p>【判断基準】C、Dの場合は改善策を検討する。</p> <p>【分析】弁論部で1件、郷土研究部で2件、日本政策金融公庫主催ビジネスプラングランプリでベスト100に1件入賞。</p> <p>【今後の取組】学業と並行しながら、課外活動にも積極的に取り組めるよう生徒へ声掛けを行っていく。</p>
	CEFR B1以上の生徒の増加	<p>【成果指標】（生徒）</p> <p>2年生のGTEC12月受験で2CEFR B1以上の生徒が昨年と同水準の人数である。</p>	<p>CEFR B1以上の生徒が</p> <p>A 65人以上 B 50人以上 C 40人以上 D 40人未満</p>	<p>【成果指標】<生徒></p> <p>A</p>	<p>【判断基準】C、Dの場合は改善策を検討する。</p> <p>【分析】目標を大幅に超えることができた。家庭学習をするように熱心に指導を行った結果だと考える。</p> <p>【今後の取組】家庭学習をしっかりと継続しながら、さらなる高みを目指して指導していく。</p>
学校関係者評価委員の評価		SSH事業など自然科学系の魅力ある活動の広報に努めるとともに、授業はもとより部活動においても中高連携を推進してはどうか。			
評価結果を踏まえた今後の改善方策		本校探究活動の内容を、適時、積極的に、中学校の内容との関連性を考慮しながら、探究活動・部活動での中高連携の推進を図る。			

5 働き方改革の推進					
重点目標	具体的取り組み	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
・教職員は、ワークライフバランスやタイムマネジメントを意識しながら不断に業務改善を進めるとともに、「働きがい」を持って教育活動の質的向上に努める。	<ul style="list-style-type: none"> ・情報共有をデジタル化することで、業務の効率化を図る。 ・研修を充実し教員の資質を高めることで、協業の体制をつくる。 ・学校経営計画に基づいた個々の目標を明確にすることで、達成感の共有を図る。 	【成果指標】 観点1 時間外勤務時間 観点2 ワークエンゲイジメント指標（UWES）	観点1－① 時間外勤務時間の平均が A 40時間以内 B 45時間以内 C 50時間以内 D 50時間を超える 観点1－② 時間外勤務時間の平均が 80時間を超える人数が A 3人以下 B 5人以下 C 7人以下 D 8人以上 観点2 ワークエンゲイジメント指標（UWES）の平均が A 4以上 B 3以上 C 2.6以上 D 2.6未満	【12月実施学校評価アンケート】 ＜教員＞ 観点1－① D 観点1－② D 観点2 B	【判断基準】 C、Dの場合は改善策を検討する。 〈観点1〉 【分析】 人事異動により校務分掌担当が大きく変わったことが負担へとつながった。 〈観点2〉 【分析】 UWESの平均 4…世界的にみても高い平均値 3…日本における専門職の平均値 2.6…日本の平均値 において本校平均値は 3.3 であり、「超過勤務時間」は長いものの、勤務には概ね「働きがい」を感じている。これは、石川県教育委員会庶務課福利厚生室実施のストレスチェック調査でも同様の結果が得られた。 【改善策】 校務分掌において業務内容を精査するとともに成果指標等により達成度を明確化する。また、研修制度の充実により校内組織力を高め業務の平準化を進めるとともに外部機関との連携強化により教員の負担軽減を図る。
学校関係者評価委員の評価		学校教育の充実と働き方改革の両立を達成するためには、外部資源を活用しての人数確保とデジタルの活用が必要ではないか。			
評価結果を踏まえた今後の改善方策		土曜補習や部活指導等において、運営方法を再考するとともに地域の指導員などの外部人材の活用についても検討する。			